二次元ぷち文庫

試し読み版

魔界王子の†変†態†修†行†

⇒委員長と侍女編⇐

千夜 詠

表紙イラスト：トイト

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『魔界王子の変態修行　委員長と侍女編』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

魔界王子の†変†態†修†行†

⇒委員長と侍女編⇐

千夜詠
表紙／トイト

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

アルモ

次期大魔王である、魔界の王子。悪魔らしからぬ優しい性格を父親が心配し、人間界での試練を与えられる。

マーメリア

アルモの侍女。彼が小さい時からお世話係を務めている。美麗な女性。

白い校舎が茜色に染まる頃、整然と並んだ教室の机から一斉に椅子の引かれる音が周り中から聞こえてきた。放課後という時間に入った合図である。青春の一ページというやつは、人間の学生にとっても人それぞれで、クラブ活動にいそしむ者もあれば、帰宅部なんて言われている者は親しい友人と遊びに行く場所を相談し始めていた。アルモもまたそんな学生生活を謳歌する存在である。

「アルモ君……」

要領悪くようやく帰宅の準備をしていた留学生は金髪の癖毛をしたちょっと幼く可愛らしい顔立ちをした少年である。紺のブレザーの高等部の制服を着ていなければ、小等部にも間違えられるだろう。

「ああ、雪村さん。おはようです」

クスッ、と笑った黒髪に長い後ろ髪を三つ編みにした眼鏡の少女は、雪村詩音といって、ここのクラス委員長をしている。

「それは、朝の挨拶ですよ。お昼を過ぎたら、こんにちはで、夜になったら、こんばんは、そもそも、ずっと一緒に授業を受けていたじゃないですか」

やはり紺のブレザーの制服で、チェックのプリーツスカートの彼女。他の女子よりも少しばかりその丈は長く、きちんと締められたネクタイに膝下までの紺のソックスもまた清潔感があって委員長のごく真面目な性格が窺える。僅かばかりだがアルモよりも背が高く、

というよりも留学生の彼がチビッコなのだが、均整のとれたプロポーションに、眼鏡をした顔立ちも地味な雰囲気に隠しきれない清楚な美麗さであった。

「あわぁっ、ごめんなさい」

「んふっ……、怒っているんじゃないんですよ。それより、どうです、一緒に帰りませんか？」

詩音は面倒見のとても良い女子である。日本の学生生活に戸惑っていたアルモに丁寧に風習や習慣といったものから教えてくれる。彼がクラスに馴染んでいけたのも彼女のお陰といってもよい。

本当に嬉しそうに承諾の返事をしたアルモの家は、学校から歩いていける距離にあるマンションだ。そこに彼はごく親しい間柄にある女性と二人で暮らしていたが、そのことについては、クラスメイトには姉と説明していた。本当のことは言えない。言えば迫害などでは済まないやんごとなき理由があった。

「でも、本当に、アルモ君は、日本語が上手ですね」

同じ方向に自宅を持つ詩音は、帰り道の話題の詰まったところで、これまで何度も口にした言葉を発してきた。

「えっ、あ、うん……。実家には日本人の家庭教師がいたから……」

こちらもいつもの受け答えである。

（継続魔法で、自動翻訳されてるなんて、言えないよね……）

心の中で苦笑い。アルモは一般的な人間の常識から外れた世界でずっと生きてきた存在だった。本当の年齢でいえば、こちら側の住人の平均寿命を何倍も超えていて、外国人どころか人間ですらない。

「ねえ、知ってる？　あの公園……、最近おかしな噂があって、吸血鬼だとか、悪魔だとかが出るっていうの」

ギクッ！　金髪少年の顔が引き攣った。

「へ、ええ……、それは、怖い話です」

「クスクス……、そんなに怖がらなくても……、ただの噂ですよ。本当にいるわけないじゃないですか。アルモ君は、そういうの、苦手なんですね」

素直に気持ちを表情に表してしまったのだが、臆病者に捉えられてしまったらしい。その方が都合は良かったし、事実臆病者であるのだが、男としては喜べることではない。軽い落胆を込めて、はあ、と溜め息を一つついた。

「じゃあ、私、こっちの方向だから……」

「あ、ああ、うん、です。じゃあ、また明日……」

アルモのマンションがあと百メートルほどに近付いた住宅街の一角で二人は別れる。小走りで別方向へと駆けた詩音を見送ると、不意に彼女はスカートを翻して振り返った。

「ねえ、今度の日曜日、一緒に遊びに行きませんか？　映画とか……」
微かに恥ずかしそうに微笑んだ三つ編みの少女は、少年の返事を待たずに再び自宅へと向かって歩みを進めだす。
「あ、は、はいっ！　行くです。絶対行きますです」
大きく手を振って、答えるアルモ。詩音の背中はどこか嬉しそうに見えた。
一気にご機嫌になって鼻歌させ口ずさみそうになる。妙に足が軽くて、ウキウキしてしまう。
（雪村詩音さんか……、美人だけど控えめで、清潔感があって、真面目でとっても優しくて、凄くいい人です。日曜日、楽しみだなあ……）
十三階建ての高級マンションの最上階。ここの東端にある扉が彼の住居スペースの入り口である。暮らし始めて既に三ヶ月が経過していた。
ドアノブを回してみるが鍵が掛かっている。
（あれ？　どこか、出かけているのかな？）
同居人が夕食の支度で買い物に行っていても不思議ではない。アルモがポケットから鍵を取り出そうとしたその時だった。
「んっ⁉　うっ、うわぁっ！」
いきなり蹴り飛ばされた。

「うううっ……」

廊下に伏して目の前がグルグル回る。ようやく焦点が定まって、顔を上げてみると、誰かがきつい視線で見下ろしていた。

長い癖のある緑色の髪をした女性だった。そこに赤いヘッドドレスを乗せて誤魔化してはいるが、小さく突き出た二本の角は彼女の頭部から生えた本物である。中世ヨーロッパ風の紅色のドレスを身に付け、丈は足首辺りまで長い。そこにはふんだんにレースがあしらわれ、腰まわりはコルセットで引き締められていた。胸元は大きく迫り出して、たぷんと柔らかそうで弾力を持った球体状が二つ重なりあって強い存在の主張を感じさせる。襟首には大きなリボン。そして屋内であるというのにレース付きの淡いピンクの日傘をさしていた。鋭く細められた濃緑色の瞳が強烈な不機嫌さを表している。

「マーメリア……。うう、いきなり酷いよ」

この氷のような冷たい表情の美麗な女性こそが、アルモの同居人であり、彼のお世話係兼お目付け役の従者である。

「失礼……つい、なんだか、蹴飛ばしたくなったからですわ」

無表情に徹しているのが怖い。

「なんだかって……」

「妙に浮かれた顔をしていらっしゃいました、ですわ」

「浮かれた顔しちゃいけないの⁉」
ピクッと彼女の細い眉根が上がる。きっとストレスを溜めているのだろう。原因はよく分かってはいた。それはアルモ自身の問題でもあるのだ。
ヒッ、と小さく唸って、顔を引き攣らせる少年。
「うう、ごめんなさいです」
誤解のないように記しておくが、あくまでも主人はアルモであって、マーメリアは彼の侍女である。金髪の留学生の正体は魔界の盟主である大魔王が嫡男、つまり魔界のプリンスであり、由緒正しき悪魔の血統を持つ者であった。そしてマーメリアは彼の幼少の頃からのお遊び相手であり、幼馴染みのお姉さん的存在であるのだが、有力な悪魔貴族の娘で自身も強力な魔力の使い手であることから、このたび王子の人間界滞在に同行することとなった。
「いいですか、王子……」
夕食を終えて、静岡産日本茶を一啜りした後、いつものようにマーメリアのお小言が始まる。
(はあ、マーメリアは厳しいです。いつも眉間に皺を寄せて……、せっかくの美人が台なしだよ。昔は優しかったのにな……)
鉛色の空の下、血のような赤い色の居城の中庭で二人一緒に遊んだ。どす黒い腐臭漂う

池でボートを漕いで、落ちそうになって泣き出したアルモを優しく抱きしめてくれるマーメリア。まだ二人とも小さな子供だったけど、彼女の胸に包まれて、とても甘い香と温かさを感じていく。

「聞いていますの、アルモ様！」

「ひえっ、あ、うん……」

地獄の深淵よりも深い溜め息を従者はついた。

「王子……人間界に来た目的を言ってください」

「うっ……それは……、僕が父さんの後継者になる為の試練であって……」

その先はどうも恥ずかしくて言いづらい。が、マーメリアの鋭く細められた瞳は許してくれそうにない。

「人間の女の子、百人の、しょ、処女を……へ、変態淫乱娘に変えることです」

悪魔の王子が何も人間界に本気で勉強に来たわけでもなければ、ただ遊びに来たわけでもない。

悪魔の目的は人間を堕落させ、本能の赴くままに生きることを良しとさせ、それをサポートする悪魔と相互理解を深め、神側に偏りがちな信仰のパワーバランスを悪魔寄りに引き寄せることにある。

だがこともあろうか次期大魔王たる王子アルモは、悪魔らしからぬ優しい性格によって、

人間に悪戯さえ仕掛けることができない有様。危ぶむ声と不穏な動きが魔界に蔓延し、このままでは悪魔社会の存亡の危機と感じた彼の父である大魔王は、彼に試練を与え、全ての魔神どもに王子が次期盟主に相応しいと認めさせることにしたのだ。

人間界の時間にして三ヶ月ほど前、一万人の大量虐殺と百人の処女の変態淫乱化のどちらかを選ぶように言われ、アルモは後者を選ばざるを得なかった。

「それが分かっていながら、これまでいったい何をしてきたというのです。学校に通って、人間界の常識と倫理観を覚えるのはいいですわ。ですが、人間と一緒になって、青春を満喫してどうするんですの！　だったら女の子の一人でも誘惑しなさい。そのスキルがないなら、誘拐でもなんでもして、無理やりでも快楽を身体に覚えさせなさい。いいですの、これまでアルモ様は、ただの一人も、調教してないんですのよっ！」

ゼーゼー、と激しく息遣いを荒らげる侍女の前で、王子の額に汗が滲(にじ)んでいる。

「わ、分かったよ。じゃあ、今度、クラスの委員長と遊びに行くから、その時……」

「やるのですわね」

「う、うん、頑張って、手を握ってみる」

マーメリアの電撃によって、部屋が吹き飛び、周囲一万世帯が停電になったのはその直後のことである。

＊＊

何事もなかったように部屋は元通りになっている。仮にも魔界のプリンスを守護する役目も担っているマーメリアの復元能力は凄いのだ。もっともアルモの身体が無事なのは、彼自身の力であって、臆病で気の優しすぎる性格でよく誤解はされるが、悪魔としての潜在的な力は大魔王にも匹敵する。

再びお茶を啜る侍女とテーブル越しに向かいあった天然王子。

「どうやら、このわたくしの教育方針とやり方は間違っていたようですわ。まだまだ甘かったと、言うべきですわね」

「はあ……」

アルモは背を丸めて縮こまってしまっている。

「どうも王子は、女の本質というものが分かっておいでではない」

「女の子の本質……？」

ズズッとまた一口熱いお茶を口にするマーメリア。

「ふふ、やはりお茶は静岡産の一番茶ですわ。……えっと、つまりですわ、アルモ様は人間の女の子の大半は、貞操観念が強く、いやらしいことが嫌いだと思っていらっしゃる。そもそも、それが間違いなのですわ。一部の極端な潔癖症を除けば、ほぼ女の子全員がエッチなのですわ！」

胸の前で拳をぐっと握り締めた侍女の瞳がキラーンと輝く。

強い衝撃を覚えたのは確かなのに、同時に強烈な興奮が湧き起こる。こんなにも汚らしく破廉恥なのに、瞬きすら忘れて凝視してしまう。下腹部に雪崩れ込んだ血流によって、変貌していく肉棒。下着とズボンの圧迫さえ心地よくて、奥から何かが溢れて噴出しそうだ。ビクンビクンと脈動する。

（はあ、はあ、はあ、なんだろ？　魔の血が騒ぐ……、お、抑えられない……）

むにゅっと柔らかなものが背中に押しつけられる。

「ふふ、さあ、アルモ様……、この人間の牝を貴方の好きなように甚振って、辱めるのですわ」

人間には聞こえない女性の声だった。それもよく知っている、ちょっと意地悪で、心底楽しそうな。

「マーメリア！　や、やっぱり君だったのか……。じゃあ、これは、君が仕込んだ……、ひ、酷いよ……、こんなこと……」

「なにを言って！　これが悪魔の正義ですわ。それにアルモ様だって、こんなドスケベなオマ〇コ見せられて、どうお感じになるのです？　この女は、純情な貴方を騙してましたのよ。清純な振りをして、その実は、こんな汚くて、いやらしくて……、昨晩も見たでありましょう。今もこんな状況にあって、感じているこの牝豚を嘲るのですわ」

こうやって唆してくるのが悪魔の常套手段であることはよく知っている。それでも侍女

電子書籍ストア

の言うことが全て真理であるように思えてしまう。
（雪村さんが、こ、こんな……、僕を騙していたなんて、思えないです。で、でも、こ、この目の前にある、これは……、はあ、はあ、い、虐めたい……）
魔王の血が触発される。欲望のままに行動する悪魔の本質に抗いきれなくなるほど、そこは牝の芳香が篭りきっていた。
血走った瞳で呼吸を荒くする王子の様子に、くいっと顔で合図するマーメリア。
「ほら坊主、こうしてやる」
金髪を掴む悪魔の手で、どこか遠慮がちだが、アルモの鼻先は接触の寸前まで委員長の肉ワレまで近付けさせられる。
「んあっ、うぐっ、くううう……」
触れてくる刺激の予感に尻房がぷるっと震える。その真下で、股間の熱気を頬に感じながら、童貞少年は咽せた。つい濃厚な発情した女陰臭を鼻腔いっぱいに吸い込んだのだ。
「うっぷ……っ、く、臭い……」
真っ赤になった詩音の半泣きの声が聞こえる。
「いやあああぁ――ッ！　嗅いじゃダメぇえええっ！　そ、そんなとこっ……、嗅がないでぇえええっ！」
泣き叫ぶ声のなんと股間に響くことか。強烈なバター臭い牝の恥香はそれ自体に湿気が

篭っていて少年の鼻先を蒸らしてくる。確かに臭い。堪らなく臭い。なのに、ずっと嗅いでいたくなってしまい、興奮がどんどんと高まっていた。
「うっ、うぷぅ、もの凄く、です。雪村さんの、オ、オマ〇コ……、んはっ、臭い、臭い、臭いぃいいいっ！」
「やぁあああっ、やめてぇっ、やめて――っ！」
悪魔に教室を占拠された異常な状態であることを忘れて、クラスメイト達もざわめきだす。両手を口元にあてた女子もその蔑むような目は真面目な委員長に向けられていた。
「おい、委員長のオマ〇コって、臭いんだってよ」
「しかもあんなに濡れ濡れで、おっ、腰まで振ってんじゃん」
「アルモくん、可哀そう。無理やり悪魔に、あんな臭いの嗅がされて……」
眼鏡の内側に涙を零し、鼻水まで垂らしてすすり泣く詩音の耳にもその囁(ささや)きは届いた。
「ううっ、お、お願い……アルモ、くん……ぐすっ……変なこと、言わないで……」
「はあ、はあ、で、でも、ほんと……臭いです。んんっ、んはっ、クラクラする……」
誰かが聞こえるように言った。
「自分のオマ〇コがくっせえの、アルモのせいにすんなよ」
少女の拳がぎゅっと握り締められた。
「違うぅうううっ！　私、私……はあ、はあ、はあ……」

重なりあった濡れた秘粘膜の合間から、ぬっちょりと淫蜜が零れ垂れてくる。金髪のクラスメイトの鼻に滴り、そこから彼の口へと入り込む。ヒクヒクとアナルの皺が呼吸するように開閉していた。

「くはあ、こいつ、辱められて感じてやがる。そんなに虐められるのが好きなのか、この牝豚が！　それとも、見られるのが好きな露出狂なのか。望み通り、気持ちよくなって、狂う姿を他の人間にも見せてやれ」

悪魔の言葉を否定するように必死に首を振る委員長。その様子はアルモからは見ることはできず、ただ身じろいでいることしか分からない。

（うわあ、雪村さん、こんなに、お尻振って……。これって、嬉しがってるです？　本当に、エッチな人だったなんて……。知ってる。こういう人間をそう、変態って……）

更にぐっと顔が寄せられる。

「ひ……っ！　ダメっ、ダメぇっ！　アルモくんっ……、ンぁ……っ！」

ぐちゅっ！　少年の鼻先が委員長のぬちゃぬちゃしたワレメに減り込んだ。

瞬間、本能的にしゃぶりたくなる。

「ひゃっ、し、舌っ！　や、やめっ、そんなこと、されたらぁ――っ！」

ふちょっ、ぺちょぺちょっ！　溢れてくる牝汁が頬を伝っていく。柔らかく熱っぽい微肉に口元が撫でられ、お返しするように内側から舐め回した。

ちゅちゅっ、ぷちゅうっ、ぺちょっ！　ぐちょぐちょぐっちょぉっ……。
「あひっぃっ！　きついぃいいっ、おしっこの孔っ、ひっ！　クリちゃんダメぇえええっ！」
突き返してくるような肉芽を舌先で叩くと、ビクッ、ビクッ、と詩音のお尻が跳ね躍る。クラスメイト達を挑発するように、彼女の意に反して、腰が淫乱にくねり回った。
（よく分からない……、でも、はあ、はあ、でも、美味しくて……）
舐めるたびに過敏に反応する女体が面白くて堪らない。強い興奮に引かれて、魔性が身のうちから溢れてきてしまう。
「うっぷ、はあっ、雪村さん……、皆に見られて、こんな風に、んちゅ、ちゅぱっ、なっちゃうなんて……、ぐちゅっ、ぺちょっ、いやらしい人っ、いやらしい人なんだ！」
「っはあっ、ち、違うのっ……、だって、だってぇっ、ひっ、アルモく……、んはぁっ、はあ、はあ、ぁふっ、はああん……っ！」
ぢゅぶっ！　ぐぢゅぐぢゅっ……。鼻を膣孔に抉りこませるようにして、唇を尖らせるアルモ。柔らかく肉芽を啄ばんで、きつく吸いついていった。
「きひいっっ！　クリちゃんっ、吸っちゃ……っ、いやぁああっ、おっきくなっちゃうっ！」
じわりと猛烈な快感を染み込まされて、委員長の唇が自然に開く。そこから涎を漏らして、教壇を汚していく彼女の顔はとろんと瞼が落ちていき、恍惚となったように頬は桜色

に染まっていた。
ちゅっぷう、レロレロっ！　ぢゅぷぢゅぷっ！　肉芽に吸いつきながら舌で転がす。肉ビラに挟まれた鼻先では膣孔が何度もヒクついて、牝汁を吐き出し続けた。
「すげえ、委員長のマン汁、床まで落ちてるぜ」
「普段、くそ真面目な優等生気取ってやがったのに、すげえ淫乱……」
「いやあ、見てる方が恥ずかしい……」
冷笑に揶揄する言葉、蔑みの視線を浴びながら、それでも牝の本性を隠しきれない委員長。たわわな尻肉を震わせるほどに腰を身悶えさせて、熱く疼ききったのか、肉壷を少年の顔に擦りつける。
「も、もう……やらぁ……っ、くっ、ひいいっ、オ、オマ〇コ……、痺れるぅううっ」
詩音は快楽の毒に理性が侵されている。罪深い夜の秘め事の癖なのか、猥褻な俗語を自ら口走りだし、それが彼女の卑肉が強烈に牡を求めている証拠だと少年にも分かった。
「さあ、アルモ様、そろそろ、挿れ頃、ですわ。衆人環視の中、犯される変態快楽をこの女に教えて差し上げるのですわ」
囁かれる声に素直に身体が聞こうとしてしまう。
（はあ、はあ、いくらなんでもそこまで……、で、でも……）
立ち上がった悪魔の王子の目に映るのは、辱めを肉の悦びに変えた牝豚だった。

姿を消している侍女の手で、制服のズボンのファスナーが降ろされる。
「きゃ……っ」
後方から女子の、少し嬉しそうな、小さな叫びが聞こえた。
肉悦に苛まれながら半虚ろな瞳の委員長も何事かと視線を向けてくる。
「ひいいいっ！」
途端に彼女は蒼白となって顔を強張らせた。
背が低く童顔な金髪美少年のいきり立った肉棒は、そこだけはまさしく異形の存在のものだった。馬並み、といった言葉通りの長さと太さであり、幹部に血管は毒々しく浮き上がって、ズル剥けた先端は更に太く黒光りして、鈴口から先走った淫水がだらだらと漏れ滴っている。だがこれでもまだ不完全な状態なのだ。
「ぼ、僕のオチンチン……こんなに、なっちゃってるです！」
「はあ、素敵……。王子……それが、悪魔の王の勃起……ですの。でもまだ三段変形の二段目ですわ。お猿の宇宙人や、戦闘機から人型機動兵器になるやつとはちょっと違いますけど……」
陰毛が逆立って金色に光ったりはしていない。
「さあ、一気にぶち込んじゃいなさい！」
「う、うん……」

怯えた顔をした委員長は愛らしく、それゆえにどうしても泣き叫ぶ声が聞きたくなってしまう。

（どうしたんだろ、僕？　悪いこと、しようとしてるのに……、はあ、はあ、こんなに、興奮する。いいよね、だって、雪村さんは、いやらしい変態の牝豚さんなんだから……）

湯気立てるように熱くなった尻肉をむにゅっと両手で掴んだ。

陵辱の瞬間を予感してか、ビクッと詩音の身が震える。

「ぁひ……っ、や、やめて……私、初めてなんだよ。いくら、アルモ君のだって、そんなの無理だよ。はあ、はあ、こ、壊れちゃうよ……」

委員長の引き攣った笑みが、凶悪な肉棒が近付くごとに艶やかに変化していく。期待に満ちたように潤みきった瞳が輝き、興奮にのめり込んで吐息を漏らしていた。

「ご、ごめんなさい。でも、僕、僕、雪村さんが、ヒイヒイ喘ぎ狂うとこ、見たくてしかたがないんです！」

囁き声が消えて、教室中の視線が二人に集中している。尋常ならざる牡の逸物に処女が散らされる残虐な瞬間を見詰める幾つもの瞳には、もはや哀れみは皆無であって、濃厚で邪な興味のみが宿っていると思われた。

（よ、よし……、女の子の孔に……挿れるんだ！）

独立した生き物のようにヒクつくそこに、何倍も質量オーバーした肉魂の先端をあてが

っていく。
「ひゃっ……!?　ア、アルモ君っ！　そっちっ？　いやぁっ、そこっ、汚いっ……、くっ、ンっ、がぁっあああっ、挿れないでぇえええっ！」
呆然と悪魔も侍女も見詰めていた。
「ア、アルモ様……そこは……」
アルモはまったく気付いていない。普通でない場所。牝汁を滴らせる肉壷は空いていた。少年の巨根は上半身うつ伏せてお尻を突き出したその柔らかな肉の中心に埋もれていく。
「いやあああっあっっ！　お尻の孔なんて、しないでぇえええっ！」
メリッッ!!　軋む音をたてて減り込み、押し広げられていく委員長の肛門。
「んぐっ、ほ、ほらっ、飲み込んでっ！」
ズブズブッ！　黒光りした亀頭の先端が生暖かな直腸の粘膜を感じ始める。
メリメリッ！　ズブズブズブズブゥッ！
「さ、裂けるぅうううっ……、いっ、ひいっいいっ、痛いぃいいっ、あぐっ、あっ……」
眼鏡の下の見開かれた瞳から、滝のように流れていく涙。ブルブルと全身を震わせて、詩音の肢体に脂汗が滲む。
牝の内臓の心地よさに構わず巨大な肉槍を突き込んでしまう。抵抗がきつく、直腸の粘膜が男根を強烈に締めつけた。

ズブゥッウゥッッッ！　それでも巨根の三分の一ほどが牝肉の中へと収まった。
「ひい、はひっ、ぐうっ……やめて……っていったのに……、お尻なんて、はあ、はあ、変態ぃっ、変態だわっ！　やあっ！　う、動かさ、ないで……っ」
処女のアナルの中で、ピクピクと巨根が脈動する。
（女の子の中……こんなに、き、気持ちいい……）
先走る淫水が直腸の中に染み込みながら、腸液と混ざりあって、滑りを生じさせてきた。圧迫感が馴染んでくると、ぬちゃぬちゃした粘膜の温もりに舐められる感触に、衝動が湧いてきてしまう。
「んはぁあ……、雪村さんの孔、とっても、いいです……」
「抜いてえっ！　抜いてったらぁっ、変態ぃっ！」
泣き叫ぶような罵声に、ゾクゾクと魔の血が煽られるような感覚が湧き起こる。嗜虐的な欲求が体中を駆け巡るようで、掴んだ白い尻肉に爪を立ててしまっていた。
「ふう、ふうっ、雪村さんの方が変態です。夜中オナニーして、オマ〇コとか、チンポとか、叫んでいたじゃないですかっ！」
力任せに鷲掴みした柔肌が指間から盛り上がる。身悶える委員長の足も腕も胴も、悪魔の力で押さえられて、決して逃げ出すことはできないのだ。
「痛いぃっ！　やめてぇえっ、そんなこと、しないっ、いやらしいこと、言ったりしない

っ……お願い……許して……」

歪んだ笑みをアルモは浮かべていた。

（おかしいです。僕……、自分が抑えられない。雪村さん、こんなに苦しそう、なのに……、ああ、酷いことしてしまいたい！）

ググッと委員長の中で巨根が更に伸び上がり、陰茎に幾つもの瘤のような突起が発生していく。

「だ、だめ、雪村さ……、僕……、だめ……、うぐううっ、動いちゃいっ、ますっ！」

ヌズズズッッ！　ズッポッ！　ヌッブゥッ、ヌッブ、ヌッブッ！

自分の腰、そしてドスケベに肉付いたお尻を同時に揺り動かしていた。

「ぁぐうっ！　ひっ、ひい――っ！　チンポッ、動かしちゃっ、だめええっ！　やめっ、ふぎいいっ、壊れるぅううっ！」

眉を寄せて詩音の顔が苦痛に歪む。三つ編みを振り乱して上半身を暴れさせるが、悪魔の腕の拘束はびくともしなかった。

「ふあああっ、雪村さんのっ……擦れてぐちょぐちょになってきますっ！　温かくてっ、き、気持ちいいっ！」

カリ首が傘を広げたように持ち上がって、腸液に滑った粘膜を苛烈に削いでいく。しっとりと吸いついてくる腸内のヒダに擦られて、それを肉棒全体で感じたくなってしまう。

「うぎいいっっ！　奥まで、広げられちゃうっ！　ぁひっ！　ひィ――っ！」
巨根の太さのままに拡張され、その強張りのままに直線に伸ばされる委員長の直腸。ぐしゃぐしゃに抉られ、眼鏡っ子の優等生は白目剥きそうになって舌を突き出す。そこからだらしくなく涎を滴らせ続けた。
「ひやっ！　やああっ……、もう、ズボズボしないでぇええっ……おひりっ！　壊れるぅううううっ！」
人間も悪魔も息を呑んで壮絶な肛姦陵辱を見詰めている中、アルモの腸内の汚物に塗(まみ)れた巨根の先端からはダラダラと淫水が漏れ続けていた。
ずっぷっ！　ぬっぷっぬっぷっ！　鞣されていくアナル奥の粘膜にそれが染み込み、強烈な衝撃に見開かれていた詩音の瞳が徐々にとろんと落ちていく。
「そっちでしちゃったのは仕方ないですけど……ふふ、そろそろ……ですわ……」
少々呆れながらのマーメリアの呟きも、欲求に突き動かされている少年には聞こえていない。ただ牡と悪魔の本能のままに牝肉を味わっていた。
「はぁはぁっ、オチンチンっ、気持ちよくって、止まらないよぉっ！」
悪魔の生け贄とされた少女の顔から蒼白の色が消えて、頬に赤みが差している。恍惚に汗ばんだ全身を震わしだして、空虚に疼くワレメからぬちゃぬちゃと牝汁を垂れ流していく。

隠そうか隠すまいか迷っているように上げられている腕の向こう側には、房の一つ一つが彼女の顔の大きさはあろうかという脂肪果実が実っている。柔らかくたわわに実った釣鐘形状の美しい形を誇示し、一度も日焼けしたことのない純粋な白い肌をしている。だが死霊らのような不健康さはなく、魔力と活力が漲(みなぎ)り、そして全体にほどよく脂肪の乗ったむっちりとした肉体からは溢れんばかりの牝気がだだ漏れているのだ。

チラチラと見たいのに恥ずかしがっている少年。

(胸が大きいのは知っていたけど……お尻も……)

元々括れのある腰まわりをコルセットで引き締め、雪村詩音よりも少し大きめのお尻はいやらしく強調されて見えた。谷間の丁度上辺りから細く黒い尻尾が生えているが、急速に隆起して肉付きよく、掴み応えを予見させるように弾力をもって震えている。逆ハート型の美しい形状もまた魅惑的だ。

「は、恥ずかしがってないで、ちゃんと始めてくださいませんと……」

「う、うん……、でも慣れるまで、もう少し、身体を、その、見せて欲しい、です」

「ええっ！　ええ、まあ……、これって、羞恥プレイ、ですの？」

腕を下げて巨乳の全貌を見せてくれるマーメリア。視線を逸らす、気の強い彼女の恥ずかしそうな様子がとても新鮮に思えた。

(うわあっ、乳首もエッチだ……)

電子書籍ノベル
試読版

ピンクの乳輪は美しさのバランスを保った直径で、乳首は強い発情状態そのままに大きく膨らんでいた。見慣れたはずの緑の癖のある長い髪も色めいて、肩から胸元にかかるそれがとても映えている。今すぐに、彼女の教えてくれた肉棒を挿入する孔を埋めたくなってしまうが、その衝動を抑えた。

（い、いけないです。見蕩（みと）れている場合じゃ……、えっと、陵辱、辱め、ってどうやって……、確か、雪村さんの時は……）

悪魔達が突然やってきて、皆の見ている前で、裸を晒させた。エッチな身体の反応を見ては、牝豚、と罵っていたのを思い出す。

（牝豚……か……、それに皆が見てないといけないんだよね。マーメリアはわりと背はある方だし……、動物、動物……）

何故か思い浮かべるのは十二支と。鼠、牛、虎、兎、龍、蛇、馬……。ピンときた。

「えっと、マーメリア、その、四つん這いになって……欲しいんだけど……」

オーソドックスながら基本の羞恥を煽る姿を言われ、侍女は感激と悦びを顔に表した。

「えっ、ええ、その調子ですわ、アルモ様……。では、さ、さっそく……」

素直に言われたままにしてくれるマーメリア。エナメル質のブーツに包まれた膝を床につけ両手も置くと、重力に従って豊満な乳房の先端が下を向く。とても重そうに質量を感じさせる肉の果実は、たぷん、たぷん、と揺れ動き叩きあい、大きく勃起した乳首は床を

擦りそうである。
丸々と肉付くお尻もまた自然に突き上げられ、照明に艶肌を光らせた。背後からはあの滑った女陰もきゅっと窄まった肛門も丸見えであろう。
（うわああ、やっぱり、いやらしい……。よ、よし……）
制服のズボンを膨らませたまま、魔界の王子はとても我が儘そうな体付きをした年上の侍女に近付いていく。
「じゃあ、ちょっと魔法を掛けるよ」
「はい？」
意識を集中する。ただちょっとばかりいつもより邪念が入ってしまう。ドロドロとした自分でも気がついていなかった劣情は、思わぬ効果を齎してしまうのだった。
高位の悪魔に呪文は必要なく、念じるままに構成されていく辱めの道具。
「ふぐぅ……っ！　なんれすのっ……⁉」
口元を塞がれるマーメリア。それは馬にするような手綱であった。口にしっかりと噛ませて、さっそく奥から溢れた唾液が唇の端から漏れていく。アルモの手には細い騎手用の鞭が握られた。そして彼女の露出した淫猥な身体に浮かび上がってくる文字。
「ふひっ⁉　なんれすの？」
たわわな乳房には、牝奴隷、マゾ牝と、染み一つない背中には、淫乱、肉玩具と、そそ

るむちむちしたお尻から太股にかけては、牝馬調教、性教育中とある。
「だって、書いておかないと、犯罪と誤解されちゃうです。これから外に行くんだし……」
驚いたように一瞬見開かれたマーメリアの瞳。それから一度顔色は蒼白となったが、徐々に熱を帯びたように赤く変わっていった。
「そ、そんらこと、されたら……、いえ、だめ……ってわけではありませんのよ。ただアルモ様には、まだレベルが高すぎるというか、なんというか……、ンっ！　ふぐっ、ううっ……」
卑肉に書かれた文字が妖しく青白い光を放つ。焼印されたように煙を発し、甘い香りがそこから漂った。
「はふっ、んっ……、あ、あふいっ……」
身を震わせて、うっとりと瞳を細める牝馬侍女。ねっとりと鼠蹊部の中心から淫蜜が糸引いて滴り落ちていく。求めて縋るような視線を向けられて、ゾクゾクと嗜虐的な劣情が湧いてきてしまう。
（あのマーメリアが、何かとっても可愛くて……、意地悪したくなっちゃうです）
小さな頃は優しく微笑みかけてくれて、御付役となってからは厳しく叱咤してくれたお姉さんが、ドスケベな恥ずかしい格好で甘えるように尻尾を揺らしながら腰を振っている。
ドクンと強く鼓動が鳴った。そそり立った肉茎から放たれるどす黒いオーラが全身を包

んできて、被虐の悦楽を期待する侍女の顔の前で膝をつく。普段の自分らしくないと思いつつも、暴力的に彼女の艶めいた髪を掴んでいた。

「それじゃあ、マーメリアの身体で、いっぱい勉強させてもらうです。いいんだよね」

淫靡な媚肉を彷彿させる唇の端から漏れ出る唾液を彼女の顎脇と一緒にぺちょぺちょ舐めた。

「むふっん……、ふはぁああ……」

身体が蕩けていくことを小さな喘ぎで示すマゾ侍女。好きだからこそ虐めたくなるという少年期にありがちな気持ちを初めて覚えて、感情の高ぶりは増していった。

＊＊

マンションの扉を開けた瞬間の強烈な羞恥にお漏らししそうになってしまったマーメリア。元々高級すぎるここの住人はやたらと出歩くこともなく、通路は静まり返っている。

背中に感じる少年一人分の体重が隷属感を煽って、支配される悦びが体中を駆け巡っていた。

（気弱で、頼りない感じのアルモ様が、今は、はあ、ぁああっ……とても逞しく思えますわ。お、おかしいですわ、わたくし……責められるのは、それほど……）

四つん這いの家畜の姿で主人を背中に乗せている。手綱を噛まされ、飲み込めぬ唾液がダラダラと下唇を濡らしていた。継続する羞恥で身体は火照り、頬は桜色に染まったまま

で、下腹部のワレメからぬちょぬちょと淫蜜が溢れていく。その肉ビラの合間の奥では卑壷がヒクつきを止めないで、堪らない疼きに苛まれるのだ。

ピシッ！　コルセットに巻かれた背中の上から鞭が放たれた。鋭い一瞬の痛みの後、じわじわと熱くなる。

「ほら、マーメリア、さっさと歩いて……」

自分が牝馬になった途端に、王子の雰囲気は一変しているように思える。そんな彼にキュンと胸の奥が痺れるようで、鼓動が高鳴っていた。

「ふぁあいっ、アルモはま……」

ゆっくりと腰をいやらしく振って四つん這いのまま通路を行く。母性の機能を超えて過剰に発達しすぎた巨乳も扇情的な桃尻も猥褻な媚肉の食み出した濡れた股間も剥き出しに、生暖かい外気を感じていた。

（はあ、はあ、はあ……誰も……出て、こないで……）

ぷるんぷるん、と重い乳房を揺らしながら、チラチラと他の部屋の扉を見てしまう。

エレベーターの前で止まった。鞭で一階のボタンを押すご主人様。強く願う。そこに誰も乗っていないことを。

「ンっ、はあ、はあ……、んぐっ、はあぁ……」

点滅が二階、三階と上がっていくたびに、頭がクラクラしてしまう。十一階、十二階…

…チン、と到達した合図が鳴った。
扉が開き、内部の明るい照明が差し込んだ。
（い、いやっ……）
つい顔を背けてしまう牝馬侍女。その瞬間、またも卑肉に書かれた揶揄の文字が強い熱を発した。
「ヒっ、ぐっ！　ンんっっ！」
柔肌が焼かれて、それなのに深く染み込んでくるような快感を覚えてしまう。彼が意識して施したものかは分からないが、これは躾と媚薬の効果を併せ持った呪印であった。直に気付いたマーメリアであったが、乱れ髪を激しく振って身悶え、それでも背中の主人を落とさぬように耐えた。
（強烈うぅっ、ですわ……。うっ、あぁぁ、はあ、はあ……、凄すぎる熱と、か、快感で、ああ、クラクラしちゃう……、目の前が霞んで……はへっ？　ひっ！）
自動発生したお仕置きによって顔を前に向かされたマーメリア。苦痛と恍惚を併せた表情が刹那（せつな）強張った。
エレベーターから出てきた見覚えある男。彼は隣の住人であり、擦れ違えばいつも引っ越してきたばかりの麗人に憧れめいた眼差しを向けていた。その彼の瞳が一瞬瞬きを忘れ、戸惑いと驚きを表情に示したが、それは直に興奮と蔑みと劣情に汚れる。

何事もなかったように彼が通り過ぎていくその横で、四つん這いの隣人は全身を震わせた。

（み、見られましたわ！　あっ、あああ――ッ！　あんな人間に、いやらしい目で見られ、変態女と思われて……、んっ、はあああぁ、乳首が痛い……、クリちゃんっ、伸びてっちゃうぅううっ）

お尻の孔までヒクつきだして、牝汁が一層溢れてしまう。

ピシッ！　鋭い鞭の一撃で尻肉が震えて赤く蚯蚓腫れが浮かぶ。

「んヒっ、ん……っ」

「さあ、いくですよ。お外で皆に見てもらわないと、陵辱にならないからね」

羞恥と隷属の刺激に肉体と精神が侵食されていく。

（ああ、そうですの……、わたくし、アルモ様にこんな立派な主人になって欲しくて……、こんな風にされたくて……ずっと……）

ずっと感じていた苛立ちの理由がはっきりと分かる。時には蹴飛ばし、冷たい視線を浴びせながら、いつかその反動をもって責め立ててくれるその瞬間を心のどこかで待ち望んでいた。

悦びに打ち震えながら牝馬は前を目指した。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/